

向ヶ岡学寮閉寮記念文集に寄せて

学寮部会長 経済学研究科教授 高橋 伸夫

寮生活の意義に気づくのはもっと先のこと

昨年度から学寮部会で副部会長、部会長と勤めさせていたでいます。

何か有意義なことを書いてくださいと依頼されたのですが、すぐに役に立ちそうなことは思いつきません。結局、寮生活を送ることの意義は何十年もたないと分からないのかもしれないかもしれません。

実は、東大ではありませんが、私も大学院時代に寮に入っていたことがあります。大学院生ともなると忙しくて、同じ研究室の人間としか話さなくなってしまう。しかし、寮に帰ってくると、そこには隣室の友人たちが「待って」いてくれて、今日、大学であったことをコーヒーや缶ビール片手に団欒している自分がいます。アパートやマンションでの暮らしでは、あんな経験をしたことは結局一度もありませんでした。もう二十年以上も前のことなのに、しかもたった一年間の出来事なのに、いまだに年賀状のやりとりは続いています。

かつて、私が東北大学経済学部勤務していた頃、東北地方の調査をしたことがあります。私ともう一人の教授が組んで、二人で某市の市長さんに会いに行きました。東北大学経済学部出身のその市長さんは、母校の求めなら、と快く応じてくれたはずなのですが、なかなか市長室に姿を現しません。随分と待たされた後で、やっとやってきて、

「通産省の調査担当者がなかなか離してくれないもので、遅れてすいません」

とのこと。一体何の調査だったのですかと聞くと、実は、その市には、最近大手電機メーカーの工場進出が相次ぎ、その理由を探りに来ていたというのです。実はわれわれの調査目的も同じでした。

「でも通産省の役人には分からないでしょうね」

新幹線の駅がある、水がきれいで豊富だ、高卒の若い労働力が確保できるといった理由を挙げて、確認していたけど、肝心の理由が抜けているというのです。聞かれなかったから答えなかったけどねと笑いながら話してくれたその理由とは、なんと東北大学の寮だったのです。

その市長さんは市長に就任した際に、市民の所得水準の向上と若者の地元定着のためには、企業を誘致するしかないと考えたそうです。まあ、ここまでは誰でも考えること。しかし、その方法がユニーク。実は、かつて東北大学の寮にいたときに一緒にいた工学部の連中が、いまや大手電機メーカーの本部長や部長をやっている。そこで、一人一人訪ねていって、こう言ったというのです。

「うちの市はいいぞ。新幹線の駅がある、水がきれいで豊富だ、高卒の若い労働力が確保できる」

「ここまでは、普通の話で、反応もイマイチ。しかし最後の殺し文句が効いた」

「それに、なんといっても、俺が市長をやっているんだ。俺が市長をやっている間に、一度見に来い」

そう言われて、皆見に来たそうです。そして

「確かに環境はいいなあ。気心の知れたおまえが市長をやっている間に、最新鋭の工場でも建ててみるか」

一経営学者として言わせてもらえば、結局、普通の企業の投資は、こうして決められているのです。企画書や報告書を埋め尽くしている数字は、所詮は後付の理屈にすぎません。人を動かすものは、結局は人なのです。いわゆる人脈は大きな資産であり、しかもビジネスや損得勘定抜きに形成された学生時代の人脈、特に異分野での人脈の価値は、計り知れませんが。その価値にみなさんが気づくのは、多分もつと先の話。今は、日頃一緒にバカをやっている隣室の友人たち、それでいいのです。

期待していること

法人化や豊島国際学生宿舎の完成を控えて、問題山積の学寮部会ですが、あるとき、議論を聞いていて、私は、ふと思いました。私が普段、授業やゼミで接している学生さんたちと違う種類の人間が寮生になっているとは思

えない。自然体の学寮と寮生を見てみたい……と。そこで、寮務掛の方にお願ひして、学寮を平日の昼間に「視察」させてもらうことにしました。あるときは施設掛の方の建物調査にくっついて、あるときはふらっと立ち寄って。実際に学寮で、私の知っている学生とばったり出会ったこともあります。

「そうか、君は寮生だったんだ」

昼間行ってみると、まさに白日の下にさらされて、どの学寮も建物は老朽化が進んでポロポロであることがよくわかります。

常識的に考えて、もう補修するという経済的な限界を超えている学寮がほとんどです。廃寮にして、できるだけ早く新しい学生宿舎に引越しをさせなければ。知っている学生の顔が浮かべば、なおさら親心に近い感情が湧いてきます。

そして学寮を回りながら、私はあることに気がつきました。確かに建物はどこもポロポロなのですが、学寮によつて受ける感じが違うのです。自治会が形骸化している学寮は、建物全体が寒々としていました。昼間でも暗く、人氣がなくて、特に共用部分の有様は、まさに「荒廃」という言葉がすぐに頭に浮かんできます。建物だけではなく、人心も荒廃していなければならないが……などと心配になってしまいました。

対照的に、向ヶ岡学寮は「いい寮」でした。別に持ち上げているわけではありません。純粋にそう感じたのです。もちろん建物は世間的な意味で言ってポロポロです。しかし、共用部分が暖かい感じがするのです。「談話室」(だと私は思った)は、けっしてきれいではないのですが、学生が日々たむろしているぬくもりが感じられます。食堂も食事をしながら話をしている寮生の姿が目には浮かぶような気がしました。

「向ヶ岡学寮はいい学寮ですね」

私は同行してくれた寮務掛の人に思わずそう話しかけてしまいました。

気がついてみれば当たり前のことかもしれませんが、結局、学寮とは学生のコミュニティなのであり、物理的な建物の表面を覆っているのは、学生の皆さんの日々の生活の匂いなのでしょう。一大学教師としては、その

匂いが心地いい。いや建物でさえそう感じているのかもしれない。建物調査に来ていた施設の人が

「建物は、人が歩いて、風が通るだけでも全然もちが違ってくるんですよ」

とつぶやいていたのは印象的でした。学寮がただたんに睡眠をとる場所ではなく、生活する空間として息をしているためには、寮生の自治会のようなコミュニティとぬくもりが必要なのです。豊島国際学生宿舎に移る寮生諸君には、ぜひとも向ヶ岡学寮のあの空気も一緒に連れて行って欲しいものだと期待しています。